

今年もカメラの一大展示会である CP + (シーピープラス) の季節がやって来た。

開催場所はいつものように横浜みなとみらいのパシフィコ横浜である、会場スペース全て使い尽くした規模で堂々と開催されていた。

会期は2月の23日(木)から26日(日)までである、いつもの様に初日の木曜日の午前中はプレス専用の時間帯でプレスの方、もしくは招待者しか入場できない。

一般入場者は初日の午後からがスタートとなる。CP+はスチールカメラの展示会から始まっており、一般入場者の中でも熱心な個人の方が多いため初日から盛況である。

会場は初日を除いてスタート時間が10時からで終わりは18時と比較的長い時間の展示が行われている。(最終日のみ17時終了)

開催中は早めの時間は御歳を召されたカメラ好きの方々の熱心な姿が目に入ってくる

るのであるが、午後からはよく言われている「カメラ女子」の姿が非常に目立ってくる。カメラマニアは基本男子と言う概念が根底から覆された感じで、目に入っているながらも中々納得できない自分が居るのだが確実にカメラ女子は存在し且つ増えているようである。

特に2人もしくは複数のグループで来場している形が多いようで、故に非常に目立つのも事実である。

またカメラ好きの旦那さんと奥様と言う組み合わせもあるようでメカ好き男子ばかりを想像すると、現実のとのギャップに驚かされる。

逆にメカ男子や古参のカメラマニアの方々向けにはアウトレットコーナーとして隣の会場に設定されている場所が人気だった。

往年の名器であるオールドカメラが銀塩カメラ(フィルムカメラ)、デジタルカメラの区別無く展示即売されていた。所謂中古カ

メラであるのだが、流石にカメラの展示会に出展し持ってくるだけのカメラ店が蔵出しをしている様だった。

大判のフィルムカメラやオールドレンズのラインナップを見ていると買う気が無くても、なんだかワクワクしてくるものである。

そのワクワク感を多くのカメラ愛好家が場所と雰囲気共有している姿は、ほっとするような空間であった。

また、その一部にはカメラアクセサリメーカーがアウトレットの店舗を出店しており、カメラバックやフィルター、三脚、交換レンズなど目白押しで、ついつい財布の紐が緩んでしまう雰囲気を作り上げていた。もちろん個人的にも散財したのは言うまでも無いだろう。

この様に一種のお祭り感覚に溢れた部分も持ち合わせている CP+ であるが、本分はカメラメーカーの年に一度の展示である。その展示の状況はと言うと、今年はいつに

用語解説

「AnimeJapan」(アニメジャパン・ビジネスデイ)

3月の好例となったアニメ業界の一大イベント、アニメジャパンが今年も開催された。

会期は3月の23日から26日の4日間なのであるが、23日、24日はビジネスデイであり、アニメイベント満載の25日、26日とは少々毛色が違う。

もちろん、25日、26日が本編であり本番なのであるが当然入場料も必要で事前割引が1800円、当日は2200円となっている。

この両日は土曜日、日曜日と言う事もあり多くの人出があり、姿としてはアニメのプロがやっているコミケと言ったところである。

その前日と前々日にアニメジャパンのビジネスデイは開催されている。

ビジネスデイと言う事で、プロのバイヤーとアニメコンテンツを持っている会社などが商談を行う場として運営されているのであるが、セミナーも充実しており、アニ

メのプロ、トラの穴の様相を呈していた。

展示ブースはアニメコンテンツを所有している会社が出展しており、バイヤーや相談したい人がブースを訪れると言う形である。

今年は出展ブースも多く、出展者も様々だった。特に出展者の母体会社のサイズに関わらず多くのブースが出ていた。

業種としてはテレビ局系、代理店系、アニメレーベル系、アニメ制作会社と色とりどりでブースのサイズは所有しているアニメコンテンツ数で決まっている様な印象を受けた。

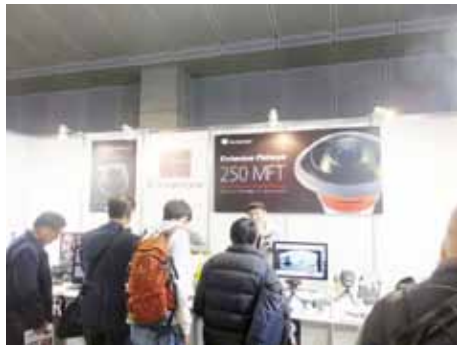
特に驚かされたのは中国からの出展者が多かった事だ、最近では日本のアニメ会社に中国の会社がアニメ制作を依頼するケースが増えており所有コンテンツも多いのだと思われるのだが、日本のアニメイベントで販路を探すと言う形式はいささか奇妙な気もする。

また中国の動画サイトも出展しており、

中国国内でのアニメの活況振りを伝えていた。

もしかしたら日本が中国製のアニメの輸出ハブになる日がやって来るのかも知れない、と感じたのである。





無くおとなしい印象を受けたのである。日本のデジタルカメラ業界もミラーレス一眼ブームのイケイケ状態から一段落しているとは聞いてはいたが、今年の展示は顕著にその傾向が出ているのかも知れない。

特に個人的に期待していた Panasonic の展示は新型のフラグシップモデルである GH-5 を引っさげているにも関わらず、ぱっとしない展示だった。

高性能化は果たしており 4K ムービーや更なる高解像度への対応も可能な様であるが、やるべき技術革新が尽きてきたのだろうか？、なんだか精彩を欠いた感じを受けてしまったのである。

逆の見方で各社のブースを見てみると (Panasonic 含む)、それぞれのカメララインナップを丁寧に見せている展示と言えるだろう。

各社共に全ての機種と、その応用事例をしっかりと見せていた。過去の全ての機種を展示するメーカーもあったのだが郷愁は誘われるもののなんだか物足りない。おそらくは歴史を展示する事によってデジタルカメラ時代における新しいブランディングを確立したいとの思いなのだろう。

そういう意味では過去のブランドの繋がりが独りから独自性を訴えているメーカーは多かったように思う。

ライカやハセルブラッドは、そのいい例だろう。過去に確立したブランドイメージと地続きの製品を地続きの価格帯 (高価格帯) で展開していた。高価格帯の製品に絞り込む事の勇気を持てれば、日本のデジタルカメラメーカーも安定するのかも知れない。

しかし、その場合は量産性と一般コンシューマー製品を展開する道からは外れる事になりかねない、コンシューマー製品の魅力を知ったメーカーがその魅力に捕らわれずに進むべきかは個人的にも判断しづらいところである。

どちらかと言えば、ハイブランドなイメ

ージを保つべきだとは思っているのであるが。

そういう意味では、象徴的な変化が CP+ でも起こっていた。例年であれば動画カメラコーナー、つまりプロ用のデジタルシネマカメラの展示と運用の為の周辺機材を展示するコーナーが会場の端に置かれていたのであるが、今年はフードコートとなっていたのである。

それではプロ用のデジタルシネマカメラは展示として消えていたのかと言うと、各社のブースの中で細々と展示紹介されている形をとっていた。

既にデジタル一眼レフカメラで 4K の動画を撮る事は難しいことではなくなっている今、デジタルシネマカメラのフラグシップ感は薄れている。

更にプロ用のデジタルシネマカメラは使う人間そのものの数が限られている為、一度購入されると壊れる事がなければ再度購入はされにくい。

またレンタル製品として貸し出される事も多いので一度数が出てしまい普及してしまうと商売としては売れずらい商品となってしまうので展示して啓蒙する必要がなくなったのだらうと思われる。

この様に一度普及してしまうと母数が少ない場合、買い替えまでのタイムが長くなり商売として成立しづらいのである。

それではデジタルシネマカメラと言うブランドが CP+ で力を失っていたのかといえば、それは違っていた。

カメラ本体は目にしづらい状態になっていたが、デジタルシネマカメラを紹介し続けていたおかげでシネマレンズの存在を知らせる事が出来ていた様である。

デジタルシネマレンズは PL マウントで接続される解像度の高いハイスペックレンズである。

このイメージから PL マウントとシネマレンズの展示は多かったように思う。つまり関心はシネマレンズに移ったとも言えるだろう。

特にカメラ本体と関係性はあるものの、工夫をすればどのカメラでもレンズは使う事が出来る。また本体を複数台持つ事は難しくても交換レンズを数多く持つ人は多いはずである。

つまり、消耗品に近いが芸術品でもある交換レンズはカメラ本体の不況をものともせず、活況を呈し始めていたと思われる。

特にブランドイメージの確立した、ツァイスやフォクトレンダーなどの高級レンズは人だかりも多く、小さな日本国内のレンズメーカーも野心的なレンズをブース出展したりしていたのである。

普及してしまった母数の多いカメラ本体に対するレンズは今後の日本のデジタルカメラ業界を支えて行くかも知れない。オールドレンズなどの名器レンズが大事にされる時代だからこそ、職人気質の日本人がデジタルカメラを作り続ける理由があると信じている。

Yoshishige Matsuno
VFX スーパーバイザー

映像スタジオ施工

多様化するデジタル映像環境に対応、映像スタジオ施工なら豊富な実績、直営システムに依る徹底したコストダウンを実現する



匠の技をスタジオに

MA室 ブース 各種 編集室

新設、リニューアルに関わらず何でもご相談ください。

～映像・音響専門で
39年～

(映像・音響・防音・建築・設計・施工)

一級建築士事務所

高橋建設株式会社

本社 〒216-0032 神奈川県川崎市宮前区神木1-7-8

TEL 044-853-0547 FAX 044-852-1588

(社) 日本プロダクション協会会員 / (社) 日本音楽スタジオ協会会員
(社) 日本音響学会会員

http://www.takahashi-kensetsu.co.jp
info@takahashi-kensetsu.co.jp